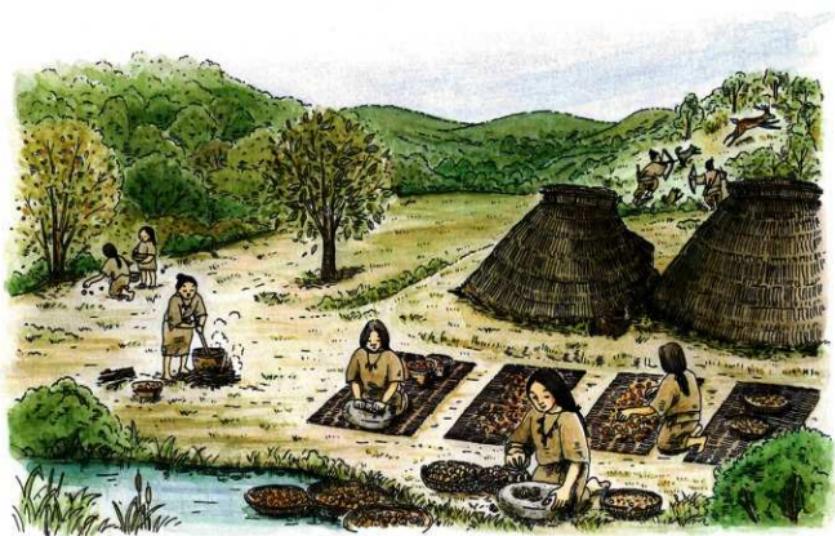


第2回掛川考古展  
「掛川のあけぼの」



栗下・メト遺跡(東山口)から想像される縄文時代の人々の暮らし

とき 平成18年10月14日(土)~22日(日)

ところ 大須賀図書館 2階 ギャラリー

掛川市教育委員会

# ◆掛川の縄文時代遺跡分布図

● 遺跡



# 掛川のあけぼの

曙とは、夜がほのほのと明けるころを言います。

昨年の4月1日、掛川市は北にそびえる標高832mの八高山から、南に広がる太平洋岸まで、山から海までの多様な地形と環境を持つ市として新たな歴史を歩み始めました。

では、掛川市にはいつごろから人が住み始め、「掛川のあけぼの」を迎えたのでしょうか。また、そのころ人々は、どのような生活をしていたのでしょうか。

市内に人が住んだことがわかる確実な時代は、今から1万3千年ほど前の縄文時代初めのころです。

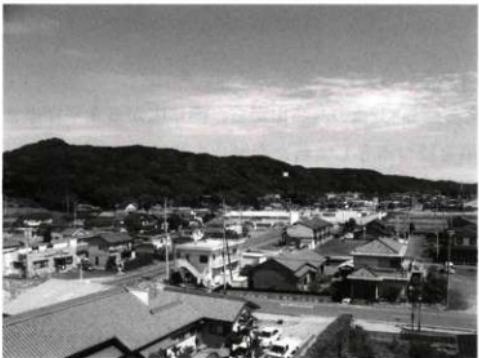
今年の考古展は、「掛川のあけぼの」というテーマで、掛川に人が住み始めた縄文時代の人々の暮らしをのぞいてみましょう。

## 縄文時代の始まり

今から1万8千年ほど前、地球の平均気温は現在より6℃～7℃ほど低く、高山、寒帯の海は厚い氷で覆われていました。そのため、海面は今より100mほど低く、海が退き、陸地が広がっていました。このころの日本列島は、大陸と陸続きとなり、日本海も湖になっていたと考えられています。



海が最も拡大した6千年前の海岸線



6千年前の海により斜めに切ったように削られた海食崖(大湊地区)

ようになりました。この現象を、**縄文海進**と呼んでいます。市内南部の山崎地区から大坂地区にかけて、東西約7kmにわたり直線的に延びる小笠山南麓の地形は、このころの海岸線であったと考えられています。

## 土器と弓矢の登場

このように、人々を取り巻く環境が変化するなか、1万3千年ほど前に初めて土器が使われ始め、弓矢も登場します。これは、食料としていた動物・植物の種類が気象環境の変化によって変わってきたことから、人々がそれに対応するように発明したものでした。

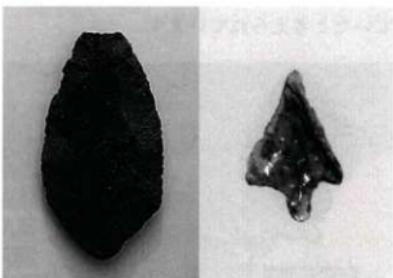
土器は、最初は入れ物として使われていたようですが、その後、煮炊きを行う容器となりました。調理方法に煮炊きが加わったことにより、食料となる材料が一層増え、縄文人の暮らしに大きな影響を与えたと考えられています。

一般に、土器の登場を時代の大きな変化ととらえ、土器が登場する前を旧石器時代、土器の登場から、稲作を主体とした暮らしに変化した2千5百年ほど前(弥生時代)までの約1万年間を縄文時代、と時代区分しています。

## 縄文時代の区分

長く続いた縄文時代は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に区分されています。石器や土器などの道具とくらし方は、時期・地域によって違いがあります。

その後、しだいに気温が上昇し、今から6千年前、現在の平均気温より3℃ほど高くなつて、温暖化のピークを迎えました。高山、寒帯の海を覆っていた氷がとけ、海面は現在より数mほど高くなり、海が大きく広がつて、平野や谷間にも海が入り込みました。現在の海岸付近は、海面下となり、三陸地方や紀伊半島のような入り組んだ湾が、各地に見られます。



ヤリ(左)から石鎚(右)へ

13000年前	10000年前	8000年前	6000年前	4000年前	3000年前
草創期		早期	前期	中期	後期
ヤリ					
	弓矢				
	土器				
	竪穴住居				
				大規模集落	
					稻作

## 人々のくらし

縄文時代は、狩猟・採集を中心として生活していた時代でした。温暖な気候と土器の発明による食材の多様化などが定住を可能にしたので、旧石器時代のような獲物を求めて移動していく必要はなくなりました。人々は定住し始め、集落(ムラ)を作っていました。

## 縄文人の顔

縄文人は、どんな姿をしていたのでしょうか。各地の遺跡から出土した人骨の分析から、身長は今の日本人より低く、成人男性の平均は158cmぐらい、成人女性で148cmぐらいと推定されています。がつちりとした体型で、顎つきはほりが深く、顎の幅が広く、四角っぽい、えらのはった顔立ちだったようです。写真は、市内東山口地区の栗下・メノト遺跡から出土した約3千年前の人の顔を模した土器です。どうでしょう、誰かに似ていませんか。各地の遺跡から、ネックレスやかんざしなどの装身具が出土しています。縄文人の装身具は、魔除けの意味があったと考えられています。写真的粘土を焼いて作った円いものは、栗下・メノト遺跡から出土した土製耳飾です。直径6.3cmの大きさがありますが、耳たぶにあけた穴にはめ込んで使用していましたと考えられています。



人の顔を模した土器



土製耳飾

# 掛川市の縄文時代

市内の縄文時代の遺跡は、北部に60ヶ所ほど知られているのに対し、南部では4ヶ所知られているだけです。これは、縄文海進の時期に南部地域の多くが海面下であったためだと考えられます。

掛川市で一番古い遺跡は、市内北部原野谷川流域の高田上ノ段遺跡(高田)と堂山遺跡(原里)で、約1万3千年前に使われていた石器が出土しています。

南部地域では、4千5百年ほど前の中期になると海岸部分にできた砂堤列の上や入り江に面した丘陵などから、人々がいたことを示す遺物が発見されています。

## 遺跡から見たムラと人々のくらし

平成9年度～11年度、16年度の発掘調査によって縄文時代のムラの一部が明らかになった栗下・メノト遺跡(東山口)を中心に、縄文時代の人々のくらしのようすをみていきたいと思います。この遺跡は、今から3千年前ほど前の縄文時代後期から晩期にかけて営まれたムラの跡です。

### 【栗下・メノト遺跡】

この遺跡は、栗下遺跡とメノト遺跡という別々の遺跡でしたが、発掘調査によって栗下遺跡が住居がある場所で、メノト遺跡が木の実の水さらし場所であったことがわかりました。このように、この二つの遺跡が一つのムラであったことから栗下・メノト遺跡と呼んでいます。

### ムラをとりまく景観

当時の栗下・メノト遺跡の周辺は、どのような環境だったのでしょうか。

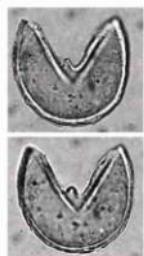
遺跡は、二つの川に挟まれたなだらかな丘にあります。当時の平均気温は、現在より少し低かったと言われています。遺跡の土壤から採取された植物の種子・花粉の分析をおこなうと、当時の植生が復元されます。この分析によりわかった樹種は、照葉樹のアカガシの仲間(これはドングリの木です)と、シイノ



北部の縄文遺跡の立地(栗下・メノト遺跡)



南部の縄文遺跡の立地(石津遺跡)



出土した花粉

キで、森の半分以上を占めていたと推定されています。次に落葉樹で、ドングリのなるコナラの仲間とクリの仲間が生えていたようです。森には、これらの樹種を主体にして、ヤマモモやサカキなどの照葉樹やスギ、クルミ、エノキ、ムクノキ、ウルシ、トチノキの仲間がところどころに見られました。草本類としてはイネ科、セリ科、ヨモギ属などの花粉が見つかっていますが、量が少ないとから大規模な草原のような草地はなかったと思います。

この他、種子の分析でわかったものは、木ではフジ属、マタタビ属、ニワトコなど、草では、スゲ属、イヌタデの仲間、ヒュ属、ヒシ属などです。

このように、ムラの周辺には照葉樹林に落葉樹が少し混ざるという状況で、現在の東山口地内で見る雑木林と同じような植生だったようです。

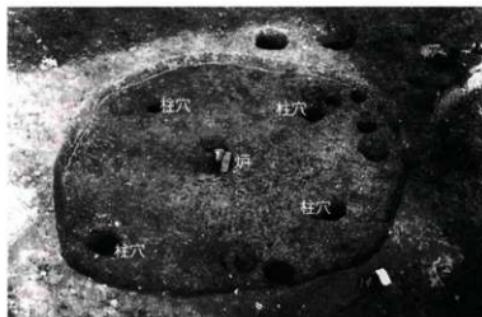
なお、トチノキとマタタビは、現在この付近では見る事ができません。特にトチノキは、市内に自生地はなく、天竜川筋の水窪や佐久間以北でないと見られません。当時この付近にトチノキがあったということは、現在よりも少し気候が寒冷だったのでしょう。

### 家のようす

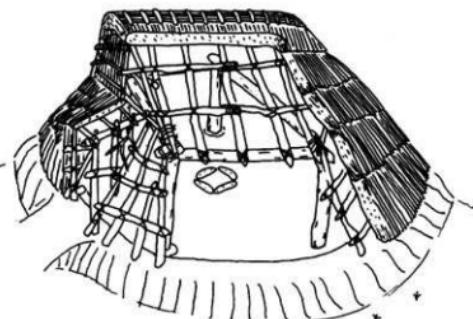
栗下・メノト遺跡からは、家の跡が発見されました。残りが悪く、大きさなどよくわかつていません。掛川市では、向畠遺跡(八坂)、中原遺跡(吉岡)などで今から5千年前ほどの縄文時代中期の家、竪穴住居の跡が見つかっています。参考に中原遺跡で発見された竪穴住居を見てみましょう。



海老名滝  
きりなだき



中原遺跡竪穴住居跡



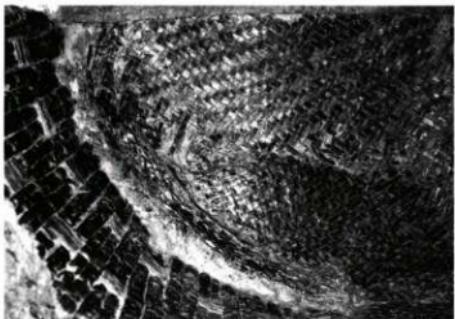
中原遺跡竪穴住居復元図

海辺の村で特に重要な食材は、比較的簡単に、多量に探すことができるアサリやシジミ、ハマグリなどの貝類だったと考えられます。掛川市内では見つかっていませんが、袋井市、磐田市、浜松市などでは貝殻を捨てた貝塚が見つかっています。

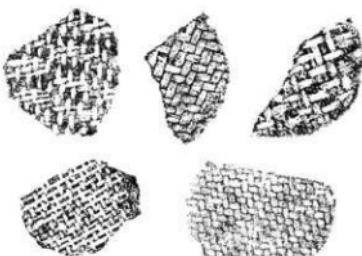
## 編み物

栗下・メノト遺跡では、ドングリの入ったカゴや土器の底に付いた編み物の痕跡など、多くの出土品から編み物を確認しています。発見された編み物には、多様な編み方があることがわかり、3千年前の人々の技術の高さに驚かされます。

出土した編み物7点の材料の分析をおこないました。その結果、5点がタケ、1点が双子葉植物の茎、不明が1点と判明しました。このタケは、今でも川の堤防などにたくさん生えているシノダケと推定されています。このほか、カゴや布などの編み物を作る材料には、マタタビやフジ、クズ、ツルウメモドキなどのツルや木の皮が考えられます。アサやカラムシから採った繊維は撚りをかけて糸にして、布・ひもを作っていたようですから、これらを使って服を作っていたと思います。



編みカゴ



土器底の編み物痕跡(拓本)

## いろいろな石器

### ●作業用石器

シャベル・鎌のように地面を掘るために使った石器が打製石斧です。砂岩のような目の粗い石材を打ちかいて作られています。土工事を多く行ったのでしょうか、栗下・メノト遺跡からは何百本という打製石斧が見つかっています。木を切ったり削ったりする斧やノミのように使った石器が磨製石斧です。目の細かい石材を磨いて作られています。どちらも木の枝を加工した柄に装着して使いました。



打製石斧(左)、磨製石斧(右)

## ●折りのための用具

縄文の人たちは、自然の恵みを受けてくらす反面、自然がもたらす災いや病気などに対する脅威を感じていましたので、自然に対する感謝と畏敬の念を強く持っていたと思われます。そのような縄文人の折りに使われたと考えられる石器が、市内の遺跡からも出土しています。栗下・メノト遺跡からは、石棒、石刀、石冠などが出土しています。これらの石器は、米作りがおこなわれる弥生時代になると使われなくなることから、縄文時代の生活と密接に結びついていることがわかります。



石棒・石刀・石冠

## ●運ばれた石材

石器は、目的に適した石材を選び、作られました。砂岩などの目の粗い石材は、石皿や磨石、打製石斧などに使われ、目の細かい石材は磨いてつくる磨製石斧などに使われました。石鎌は、小さいもので1cmくらい、大きいもので3cmほどあります。動きのすばやい小動物を獲るために、ガラスのように鋭利な石で作られた石器が必要でした。

栗下・メノト遺跡から出土した石鎌には、この付近では採れない石材が使われています。黒曜石と呼ばれる火山ガラス6点の原産地を分析したところ、1点が伊豆半島の柏崎（現在の伊豆市）産、残りの5点は長野県産であることがわかりました。下呂石と呼ばれる石材でつくられたものもありました。この石は、名前のとおり温泉で有名な岐阜県下呂で採れる石です。直線距離で伊豆柏崎まで100km、下呂まで140km、長野県の産地まで150km離れています。



掛川へ運ばれた石材の供給地

## 縄文的くらし・あけばのから未来へ

自然と共に生し、自然に負荷をかけない持続可能なくらしが、今一番必要だと言われています。私達は、縄文人と同じくらしはできませんが、これから私たちの生き方にヒントを与えてくれるかもしれませんね。

## 開発予定地内に遺跡はありませんか？ 工事の計画前に確認してください。

掛川市内には現在694遺跡が確認されていて、県内でいちばん遺跡が多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの“心のふるさと”であり、後世の人たちに伝えていくことが大切です。

そのため、「文化財保護法」により、遺跡がある場所で土木工事や建築工事、茶園の改植などを行う場合には、事前に文化庁に届け出をすることが義務づけられています。

届け出をしないで工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり、完成が遅れてしまった・・・ということがないように、工事を計画する場合には、早めに掛川市教育委員会にご相談ください。

なお、教育委員会・図書館には、市内にある遺跡の位置を記した「遺跡地図」がありますので、工事を計画する前に必ず確認してください。

---

掛川市教育委員会 教育文化課 文化財係  
電話 (0537) 21-1158

### 〈引用文献〉

- ・掛川市史上巻
- ・わたしたちの掛川市【歴史編】
- ・八坂別所遺跡・頭地遺跡・栗下遺跡・メノト遺跡発掘調査報告書
- ・県立農業総合開発事業東山口地区に伴う埋蔵文化財整理調査自然科学分析委託報告書



文化財愛護シンボルマーク